

【歌詞】

一景

埋葬された大津皇子の目覚め。

した したと垂れる水の音。遠く聞こえる こう こう の魂呼びの声。

した した した

(こう こう・・・)

深い闇の 黒い巖の下で

時がたった。けれども耳面刀自、まだおまえを思っている。

つた つた

おお寒い。著物きものを、著物をください。

(こう こう・・・)

二景

当麻の語部の媪が二上山に埋葬された大津皇子の言寄せをする。

そして当麻までやってきた藤原郎女に問いかける。

この山に眠る大津皇子さまが、おまえさまをお呼びなされた――

ひさかたの 天あめふたかみ二上に

三景

なぜ深窓の姫君がここまでしのでやってきたのか。

彼岸の中日に二上山に見た「倂びと」を慕って来たのだ、と語る。

いいえ わたしは 山をおがみに

あの山の 入り日の中に 倂びとを

ほほき ほほきい 鳴く鳥の 翼があれば

訪ねこう

わが魂たまを むすびたまえと

我あが見つる 青馬あわうまの 耳面みみ刀自やまの

刀自やまもがも。 女弟おともがも。

吾あはもよ惚しめぶ 藤原ふじわら処女をとめ。

——お聴きおよびかえ、藤原の郎女さま。

四景

そしてある夜。藤原郎女の元に、大津皇子（の魂）が訪れ、交感する。

これは郎女の夢にすぎないのか。それとも——

つた つた 激ち 降る 谷のとよみ

海の中道を

掬べども流れる白玉

水底に水漬く身は 白い珊瑚樹

あなたうと なも なも

五景

蓮の葉で織物を作る。郎女はそれで寒そうな佛びとの肌を覆ってやりたいのだ。

蓮葉を 績もうよ

夏引きの麻生の麻を績むように

機を織り

ちようちよう はたはた

衣にして

はたはた ゆらゆら

きりはたり ちようちよう

はた はた ゆら ゆら はたた……

ゆうべのまぼろし おもかげびとの

六景

曼荼羅ができあがった。

姫はにこやかに笑いながら、人知れず御堂から出て行った。

姫にとっては彼の人の姿を描いたもの、しかし人々には白日夢のような曼荼羅が残った。

すがたを。

なも あみだほとけ あなたうと あなたうと

光明遍照十方世界 光明遍照十方衆生